

第6章 考察

第1節 煮沸具の外来系土器について

—古墳時代後期と平安時代の動向—

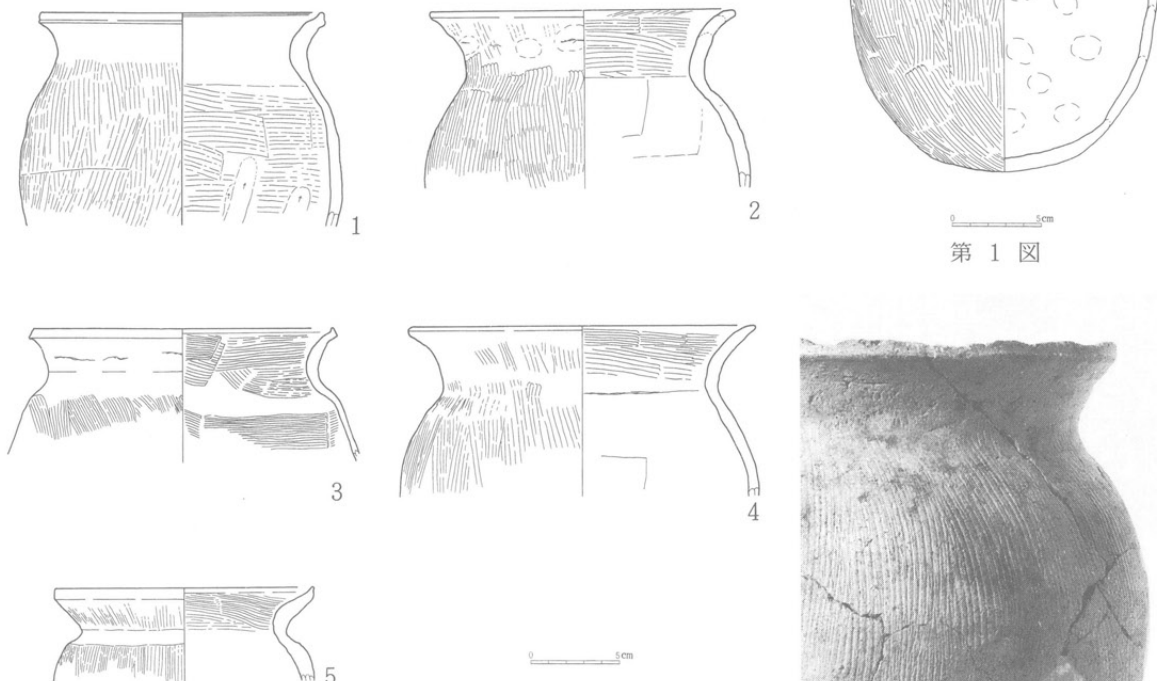
1 はじめに

遺物を観察する中で、佐久市・小諸市に所在する遺跡群では刷毛目調整を施した在地の土器・周知の搬入土器以外に未周知の外来系土器が看取されたため、それらの土器に関して報告したい。

2 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の外来系土器

(1図、写真1)を出土した中原遺跡群302号住居跡は調査区の北端に位置し、遺構の規模は南北5.05m・東西5.10mを測る方形を呈し、今回の調査遺構の中ではやや小ぶりの住居跡である。7世紀後半の甕と共に出土している。(1図)の土師器甕は小型で器高は19.2cm・口縁部径14.6cm・胴部の最大径は16.8cmを測るものである。底部は丸底・内面と外面には刷毛目調整が施され内面下半はヘラナデが施され、口縁端部を摘み上げている。

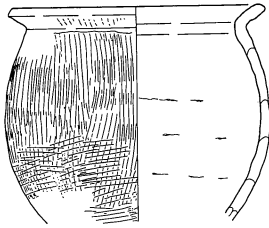
この特徴を有する土師器甕は近畿地方に多く見られ、関西方面にその起源を求められてきた。このタイプの土器は中原遺跡群、芝宮遺跡群の両遺跡からも数十点出土しているが、全て破片で口縁部から底部まで復元し得たのはこの遺物だけであった。このタイプの土器は破片になってしまうと口縁部・胴部の張り、器面の調整といったこの土器の特徴がわからなくなり、畿内周辺



第1図

第2図 芝宮・中原出土の甕

写真1



第3図

でも他の土師器の甕の特徴とかなり共通するため、甕の地域を特定できなくなる。そのため今までは、近畿・関西といった広域な地域を想定するしかなかった。

昨年、資料の増加や「古代の土器研究会」や関西各地の土師器甕を観察するにあたり、三重県南伊勢地方の7世紀後半から8世紀初頭のいわゆる北野型に相当するものと考えられる（上村氏の分類によると甕A1類）。

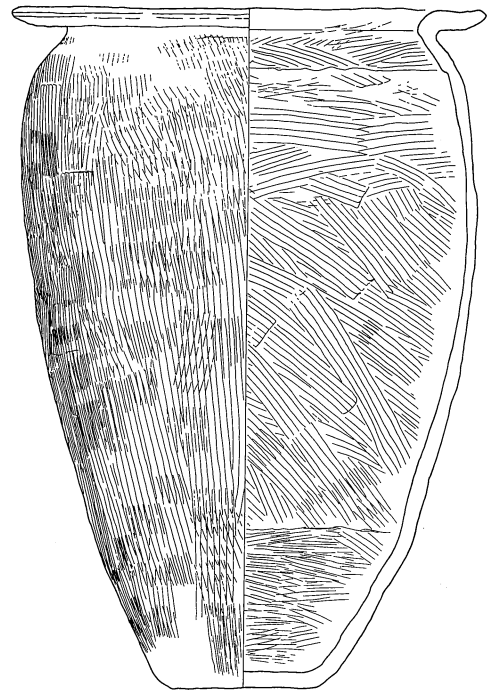
上記の土器をきっかけとして土器の洗浄後の観察を試みた結果、数個体の刷毛目調整の小型甕が出土し、その内5個体が図化できた。（2図1）は芝宮遺跡群の70号住居跡（6世紀後半）から出土し、口径15.2cm・残存高11.3cmを測り、胎土・焼成は在地のものとは異なる砂質なものにぶい黄橙色（Hue10YR6/4）を呈し、形状は口縁部のつまみあげが確認出る。また特徴として外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目の後胴部下半は縦方向のヘラケズリが認められる。胴部外面の最大径付近には一条の沈線が巡っている。

（2図4）は中原遺跡群の44号住居跡（9世紀初頭）のカマドの東側から出土し、（2図5）は芝宮遺跡群の30号住居跡（9世紀代）から出土している。両者とも(1)に類似しするもので、口縁部につまみあげが施されている。（4・5）は口縁直下がやや張り出し肩部を形成している。また、(5)はやや小ぶりの個体である。

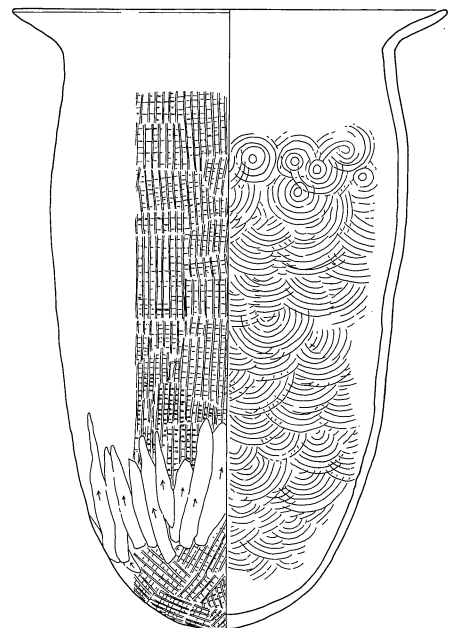
（2図2・3）は芝宮遺跡群の206号住居跡（7世紀後半）のカマド周辺から出土している。（2図1・4・5）に共通の口縁部つまみあげは認められず、外反しながら大きく開いている。また、胎土は前者に比べ緻密で、色調は橙色（Hue5YR6/6）を呈している。

以上の土器の他に平安期の遺構からやはり刷毛を多用する小型甕が出土している。（3図1）は芝宮遺跡群の9世紀第3四半期と考えられる89号住居跡から出土している。口径は13.8cm・残存高10.6cmを測り、外面には主に縦方向の刷毛目（同部下半では横方向）が施され、胎土はやや砂質な灰黄褐色土（Hue10YR6/2）を呈している。胴部の最大径は中位にある肩の張らないほぼ球形といえる形状をしている。栗毛坂遺跡群B地区の18号住居跡でも類似する土器が出土している。

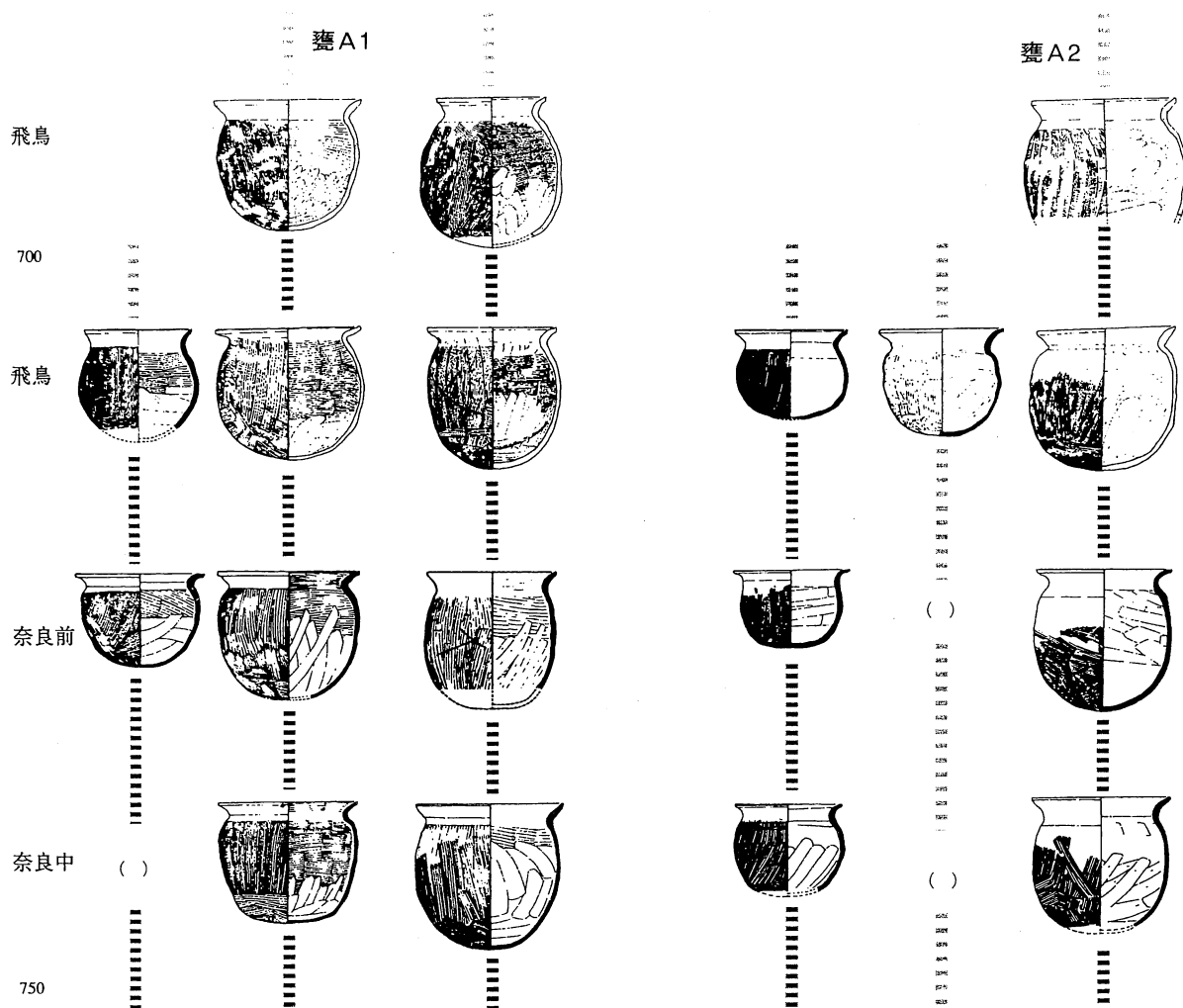
詳細な生産地は不明であるが愛知県の大毛沖遺跡に類例が認められる他、岐阜県可児地方で出土例が増えているようであり、おそらく濃尾地方に主体を有する土器と考えられる。



第4図



第5図



第 6 図 斎宮跡甕A変遷図 (上村1996より)

また、芝宮遺跡群の9世紀初頭と考えられる219号住居跡からは長胴な刷毛甕(4図)がカマドの周囲から出土している。口径24.5cm・器高36.6cm・底径7.5cmを測り、口縁部は水平に開き、肩部と胴部下半には成形時の接合痕が認められる。図面上では濃尾甕に類似するが、実見すると胎土や調整でかなり異なる土器のようである。濃尾甕の器肉はさらに薄く、胎土の点では更に砂質のようである。この土器の類例はあまり認められず、美濃地方の南信寄りに類似する土器の出土が増加しているようであるが、実見していないため確証はない。

外来か在地か不明であるが、例外的な土器として芝宮遺跡群の8世紀前半と見られる184号住居跡からは、須恵器製作技法を用いた丸底の土師器甕(5図)が出土している。口径23.7cm・器高32.9cmを測り、胴部外面には叩き目が残り下半部ではヘラケズリが認められる。内面にはあて具痕の青海波文が認められる。

3 南伊勢地方北野系土器と東海系土器について

「この地域が須恵器・灰釉陶器の卓越した生産国であり、…土師器煮沸具についてはほとんど目が向けられることはなかった。…最近の資料の蓄積により、古代の土師器については暗黒であったこの地域についても、ようやく他の地域と比較できるようになってきた。(注4)」といわれるように東海地方での煮沸具である土師器の甕に関する研究は、胎動し始めたばかりといわざるを得ない。そういった中で出土遺

物の産地を推定するのはかなり困難なこととおもえるので、今回はあえて特定を行わない。

上村氏は当該地域の古代土師器煮沸具の分類（6図）を行っている。その分類の中で、煮沸具を甕・鍋・甗に分け、甕に関してはA～Hの7つに分類し、今回関係するA類に関してはA1～A6類に細分を行っている。

甕A1類：口縁端部をつまみあげ、体部外面を刷毛目で調整し、内面は上半を刷毛目で調整し、下半をヘラケズリで調整するという特徴的なものである。

甕A2類：内面に刷毛目調整がみられず、ヘラケズリあるいはナデによって調整されたものである。また、口縁部のつまみあげも顕著ではないものの力が多い傾向にある。

甕A3類・甕A4類に関しては外面ヘラケズリ調整で、甕A1類・甕A2類にそれぞれ対応させている。

以上を甕Aの基本構成とし、これらの土器群の他、甕A3類・甕A4類については時期的に8世紀後半ということであり、佐久地方で出土する例のほとんどが古墳時代後期（7世紀代）であることから、時期的にずれるため今回は取り上げない。また長野県下各地での要素や出土量にばらつきがあり、広く東海地方の様相を考えるまでにはいたっていないので、今回は上村氏の編年観を参考するに留めたい。

A1類とA2類については、おおそ飛鳥時代から奈良時代後期まで（7世紀後半から8世紀後半）一定量見られるとのことである。特にA1類の甕が三重県下各地で出土し、斎宮や伊勢神宮に限ることなくかなり広い範囲の流通、さらにはそれが東海地方（濃尾平野）にまでおよんでいることを示唆している。

また斎宮周辺域の特に北野遺跡などの土師器焼成坑の多さには目を見張るものがあるが、それら多数の焼成坑から「当地（有爾郷）は古代より伊勢神宮に献納する土器を焼成していた地として知られ、蓑村には神宮土器調整所があり、土器作りが今も行われていることから、当地周辺が古代の土師器の一大生産地であったことは明らかである。（注5）」とかつての生産地の可能性が指摘されている。

4 佐久盆地出土の外來系土器

刷毛目調整の小型甕は佐久地方の古代の遺跡群ではかなりの頻度で出土しているが、いまだ全貌は不明である。

佐久盆地内に存在する遺跡の調査で、古墳時代後期（7世紀代）の住居跡からしばしば刷毛目を多用する土器群が出土することが知られてた。

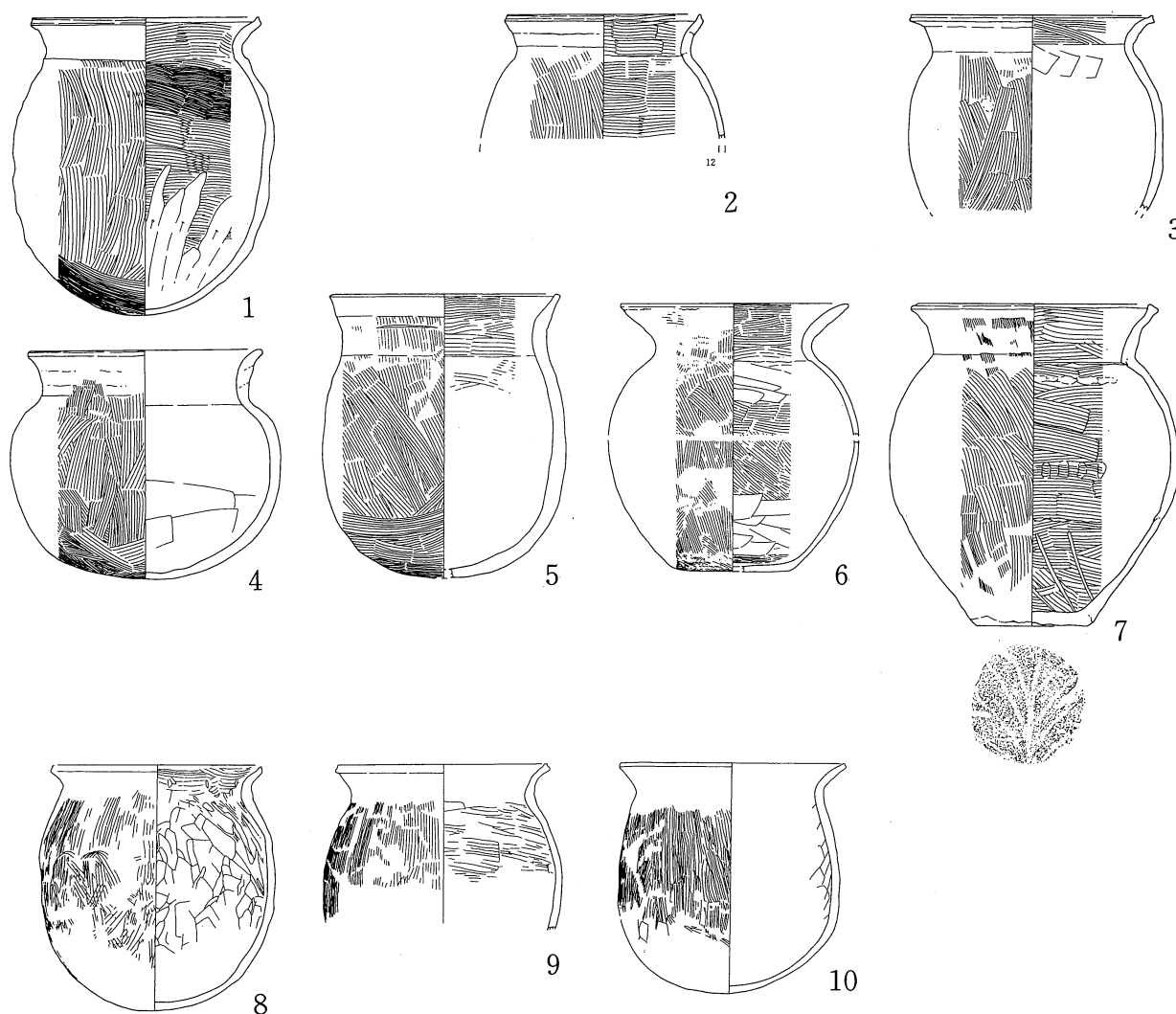
佐久地方で出土する土器の中には在地のものではない土師器群がある。武蔵型甕・北陸のロクロ甕・有段口縁坏等がそれで、これらの内ほとんどのものは、客体的というよりはある時期には主体を占めるものもあり、外來というよりは他地域の影響の下に（生産されたのか、搬入されたのかは別にして）本地域で日常的に使われたと考えられる集団である。これに対し、畿内系暗文坏・甲斐型坏・丸底の刷毛目小型甕等はあくまでも客体的な存在の域を出ず、出土例も僅かである。今回はそれらの中の刷毛目調整された小型の丸底甕を取り上げたい。

従来、遺跡から出土した土器に対して「在地のものではない」「客体的な」と判断された場合、「外來系」、あるいは「搬入品」と呼ばれてきた。

佐久市前田遺跡の報告（注2）では「搬入品」「他地域からの搬入あるいは模倣品」と定義している。花岡氏（注3）は纏向の定義を引用し「搬入品」と呼んだ。

また、今回紹介する土器とは性質を異にするが、畿内系暗文と呼ばれるグループがあることは従来より知られているが、その暗文を有する土器群の把握について西山氏（注1）は「畿内系暗文土器」という用語を使用している。

このような出土例の少ない土器を持って何を語るのかは次回として、今回はあくまでもイレギュラーな土器の紹介に留めたい。



第 7 図 佐久地方の非在地産土器

「前田遺跡」

佐久市前田遺跡では、異系統土師器の刷毛目調整された小型甕をD類とし、さらに5つに細分している(7図1～7)。その中で丸底のものをD1～3類とし関西地方という位置づけを行っている。D1類(7図1～3)は東海地方の可能性が高いと思われる。特に(7図1)は上村編年の甕Aの範疇で考えたい。(7図2)については底部が欠けるが口縁部摘み上げは観察できる。(7図3)は口縁部の形態・刷毛調整の施し方が他に比べてやや異質である。D2類(7図4)は外面に刷毛の多用が認められるが内面の調整や全体のプロポーションが異質である。D3類(7図5)の形態は胴部最大径をD1類より下位に持ち膨らみも少ない。また、D4・5類(7図6・7)は平底のもので、D5類に東海地方「駿東型」を当てはめている。いずれの土器も形態・手法・胎土が異なり、他地域からの搬入あるいは模倣と捉えている。

それらの出土した遺構の年代はいずれも前田編年のI期(古墳時代後期)である。

「竹花遺跡」

小諸市竹花遺跡では、小型の甕の中に刷毛目調整され口縁端部をつまみ上げた形状丸底のものをC類(7図8～10)として畿内系に位置づけている。(7図8・9)は東海地方産であろうか内外面に刷毛目が

看取されるが、(8)では口縁部の摘み上げがわかるが内面の刷毛調整が口縁部に留まっていることから、上村編年のA2類に該当するものであろうか。(10)は胴部最大径をやや下半に有し、内面に刷毛目が見られないことから近畿の河内・和泉地方に比定されようか。

3点の出土した遺構の時期は、竹花編年のVI期とVII期（7世紀代）である。

5 まとめ

以上佐久地方を中心として煮沸具の刷毛目調整の施された小型甕を見てきたが、二つの動きが感じられる。一つは古墳時代後期の律令導入期に南伊勢地方の北野甕、もしくはその類似甕がもたらされていること。二つ目は9世紀代の平安期に濃尾地方に起源があると認められる小型甕が流入していることである。花岡氏の指摘（注3）のように住居跡から出土する「外来系土器には、供膳具と煮沸具の二者が認められる…」そして供膳具の黒彩土器・有段口縁杯や丸底の刷毛目甕・把手付鉢の出土の仕方に片寄りが見られる点に注意を置いている。また、「それは集落の持つ性格を表わすものといえる。いずれにせよ畿内系暗文杯を含め、総体的に考えていかなければならないと考えている。」絶対量が少なく、さまざまな分野からの支援の無い中で憶測の域を出ないところが多いが、極力具体的な検証を試みその実態に迫りたい。今回紹介した芝宮遺跡群・中原遺跡群の例もそうだが、カマド周辺で出土し土器の器面には使用による煮焦げの痕跡が認められた。これは中原の例だけでなく、前田遺跡でも観察される。(7図)中の(1～5・7)はカマド内、あるいはカマド周辺の床面上から出土しているのが報告されている。さらに(1・4・6・7)では煤の付着が観察されている。煮沸具の甕であるので本来の姿であるのだが、はるばる運ばれて来たとするなら、それを日常雑器として使っていることに若干の疑問が残る。

注1) 西山氏は暗文土器からその社会的な背景を探ろうとし「土器の器形・調整や、暗文の施し方・技術、そして胎土分析等の問題から確実にどの種の暗文土器であるかを把握し、認識することが大切であろうと考える。この把握と認識をもとに、それぞれの暗文土器が作られ、使用される背景や社会状況というものを考えることが出来よう。それはたとえば、暗文土器を作る特別な人々、あるいは集団（工人・工人集団）が存在し、ある特定の地で作られたものなのか。あるいは、各地域において、作りえられる状況であったのか、そしてその作られた土器は政治的、経済的、あるいは精神面、生活面等のいずれが背景となってそれぞれの寺院・官衙・集落・墳墓に持ち込まれたものなのか。と言う事などである。」と暗文土器から当時の社会背景に迫ろうと試みている。私が今回取り上げた東海・近畿地方の煮沸具は、暗文土器とは性格を異にするものであり、同レベルでは語れないものであるが、西山氏の注意する観点は多めに参考にしたい。

注2) 佐久市教育委員会 1989『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』

注3) 花岡氏は「外来系土器の定義は、関川尚功氏に従い、『よその地域で製作されて搬入された土器とそれらをモデルとして在地で製作された土器、すなわち搬入品と模倣品』とする。」と関川氏の纏向での定義を援用し、小諸市教育委員会 1994『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』の報告では他地域の土器として「畿内系甕」の用語を使用している。

注4) 城ヶ谷和広 1996「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン（第4回東海考古学フォーラム）』

注5) 以前から文献史学の側から指摘をされていた。

参考文献

- 小笠原好彦 1980 「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』27-2
- 西 弘海 1971 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
- 西山克己 1984・1985 「東国出土の暗文を有する土器」『史館』17・18
- 花岡 弘 1991 「6 中部高地」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣
- 上村安生 1996 「伊勢・伊賀における古代土師器煮沸具の様相」『鍋と甕のデザイン（第4回東海考古学フォーラム）』
- 城ヶ答和広 1996 「東海地方の古代煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕のデザイン（第4回東海考古学フォーラム）』
- 三重県埋蔵文化財センター 1991 「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告」
第2分冊94-2
- （財）愛知県埋蔵文化財センター 1996 「大毛沖遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書66』
- 佐久市教育委員会 1989 「前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）」
- 小諸市教育委員会 1994 「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原」
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1991 「栗毛坂遺跡群・他」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1992～94 「芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9・10・11』
- （財）長野県埋蔵文化財センター 1992～93 「中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報9・10』
- 松本市教育委員会 1987 「松本市高畑遺跡」